

東北地方太平洋沖地震支援活動

耳原総合病院の支援スタート

3/11
FRY

3/11(金)午後、揺れを感じた当院総務課、施設課職員より、病院内をいつもの手順で見回り、特に異状がないとの報告を受けました。

しかし、速報を見るためにつけたテレビでは大きな地震が東北で起こったとの報道。時間がたつにつれ、被害は広がり、地震の規模も引き上げられていきました。

当日夕方には当院も加盟する全日本民主医療機関連合会の対策本部が開かれました。そこで、今回の地震が、未曾有の被害であることが確認され、支援をスタートすることが決まりました。

義援金、支援物資の準備

3/12
SAT

当院でも翌朝3/12(土)朝9時から院長の召集で緊急会議を開催。義援金を募ること、支援物資の準備をすること、支援隊を送る準備をすることを決め、急きょ支援隊を募り、第一陣には夕方出発予定で医師2名、看護師2名、事務1名の編成が組まれました。現地への交通の関係で全日本民医連事務局と調整し、翌朝に5名は宮城県塩釜市の坂総合病院へ支援に向かいました。

同時に同仁会として50万円の義援金をまず全日本民医連に送金。大阪民医連の各事業所と相談して、送付する物資や薬剤をかき集め、大阪民医連では緊急車両を2台登録して送る段取りを取りました。

また受け入れ場所の坂総合病院の状況もわからなかったため、阪神淡路大震災での支援の教訓から食糧、水や寝袋の他、身の回りの物品を自前で確保して持っていくために、購入に走りまわり、そして会議室いっぱいになった物品をスーツケースに詰める職員の姿もありました。医局では避難所でのアトピーの子供のためにワセリンを個詰めにする作業を医師たちが行いました。



医局で小分けのワセリン作り

避難所での支援



避難所でのフットケア



スタッフの待避所



支援物資のある本部廊下



救援隊姿のDr.



避難所の体育館

宮城県塩釜市の坂総合病院に派遣

今回は福島原発の事故もあり、通信状況が悪い状態が続いたこともあって、情報が十分に行き渡らない不安を抱えながら、時には東北自動車道を通らず、日本海回りで長時間かけて往復する支援隊もありました。

塩釜市は塩釜港の前に有名な松島があり、津波を多少弱めてくれたと聞いていましたが、支援隊が支援の合間に撮影した景色は報道されたものと変わりがありませんでした。坂総合病院から20分も歩く寸断された道路や打ち上げられた船、累々と積み重なる車など、廃墟と化した街並みが写っています。

坂総合病院は高台にあり、数年前に建て替えたこともあって、地震による建物被害はほとんどなく、他の医療機関が被害を受けたこともあって、救急の砦として被災者への医療力を発揮しました。しかし、法人内の職員には亡くなられた方もおられますし、被災した方もおられます。直後は着の身着のまま、不眠不休での診療支援活動でした。被災者の救援、坂総合病院への医療支援に、全国の民医連から3月末までに千数百名の支援者が入っています。

当院からの支援隊は第2陣以降も続々と手が上がり、3月末までに30名近くが宮城県入りしています。院長も状況把握も含めて支援に入りました。中には診療を休診にするなどの対応を行って支援に行った医師もいます。4月末まで支援に行く予定を決めています。状況もわからない中、手を挙げた職員のみならず、送り出して職場を守ってくれた職員

のみなさんに感謝です。

支援に求められることは日に日に変化しています。当初の病院救急外来での集中した医療対応は2週間程度で落ち着きを見せ、現在、坂総合病院は通常診療も再開しています。診療を応援しながらも避難所や家の訪問を行っていますが、阪神淡路大震災の時と比べても高齢化が進んだ地域で、看護・介護の要望が高いことが報告されています。避難所生活が長期化すればまた新たな医療要求も出てくるでしょう。住宅再建、仮設住宅建設、仕事場の再建など、生活再建へはまだ長い取り組みが必要です。宮城県以外の岩手県や福島県への支援、また坂総合病院周辺以外への支援のあり方など、全日本民医連は行政や医師会とも相談を行いながら検討をしています。相当長期化と思われる復興・再建の取り組み。当院でも引き続き支援活動を行っていきます。

社会医療法人同仁会 耳原総合病院
事務長 近藤 聡



塩釜市の海岸沿い



塩釜市の被害

坂総合病院の対策本部



坂総合病院



支援物資のある本部廊下



現地入りした松本院長



現地対策本部



朝のミーティング風景



救急外来